「さぁ今日も始めようか、イリヤちゃん？」
「……っ」
弱みを握られて以来、毎日のようにイリヤは男の訪問を受けていた。
ルビーが操られ、学友や家族を脅しのダシに使われ……ゆえに少女はじっと耐える他無い。

「もうこんなこと……やめてください……」
「こんなこと、って？詳しく言ってくれないと分からないなぁ」
「……」
男が下卑た笑みを浮かべながら少女を舐め回すように見つめた。
絹のように細い金髪、透き通るような白い肌、瑞々しい太もも――
それに、悔しさを滲ませた少女の表情がまた男の劣情を駆り立てる。

「そんなじっとしてないでさ、イリヤちゃんも好きでしょ？こういうの」
「いやっ……触らないで……ください」
「つれないなぁ。この前はあんなに淫らに喘いでたくせに」
「……ッ！」
これから犯すその場所を確認するように、男の指が少女の下腹部をすりすりとなぞる。
イリヤはその様子をじっと身を固めて耐えるしかなかった。
これから始まるであろう行為を想起して、少女の吐息に熱がこもり始める。

「ふ……ぁっ……」
「ククククッ……」
もっと明確に拒絶の意志を示す方法はある。
男の手を払い除け、罵詈雑言を浴びせればいい。
しかし、それをしてしまうと間違いなく学友や家族に危害が及んでしまう。
戦う力を奪われたイリヤにとって、今できることは身を固めてささやかな抵抗の意思を示すことだけであった。

「今日もまだ僕のことを受け入れてくれないんだね」
「誰が……あなたのことなんて」
「しょうがないなぁ。おい、やれ」

男がイリヤから離れると、その背後からルビーが姿を現す。
「了解しました、マスター」
ルビーは抑揚のない声で淡々と答えると、まばゆい光を発し始めた。

「あ…ああっ……ルビーやめて……お願い……」
「完了しました、マスター」
「よし、下がってろ」
強制的に転身させられてしまうイリヤ。
ビーストスタイル――術者の意のままに操られる、イリヤにとってはまさに呪いのような衣装である。
こうなってしまうともう、力で抵抗してみせることすら適わない。

「ああ、可愛いよイリヤちゃん……今日もいっぱい愛してあげるからね」
「いやっ！お願い……もうこんな……」
少女の必死の懇願すら、男にとってはただのスパイスである。
白い肌と黒い衣装のコントラストを前に、男の興奮は高まっていく。
髪の匂いも、柔らかで瑞々しい肌も、高く澄んだ嬌声も、きつく締め付けてくる膣の感触も――
今日もこれからこの美少女を好きなだけ味わえる。すべて自分だけのものだ。

「命令、服従のポーズ」
「ああっ……！」
「意固地になるイリヤちゃんが悪いんだよ。こんな命令、僕だってしたくないのにさ。ククク……」
男の一声で、イリヤの手足が本人の意思とは無関係に動く。
決して他人の前では見せてはいけないような、屈辱的な姿。
身を固めて見せていたささやかな抵抗も、脆くも崩れ去ってしまった。

「いいね。やっぱイリヤちゃんはこの格好が似合うよ」
「やだっ……見ないで……ください……」
「いいじゃん、これからもっと恥ずかしいことするんだからさ」
羞恥で頬を染めるイリヤ。
たとえ何度この衣装にさせられ犯されようと、行為の前の羞恥心に慣れることなどできない。
体温の高まりを感じる。はたしてそれは、この衣装のせいなのか、羞恥心のせいなのか、それとも——

「っ……ぁん……」
「ククク……もう少し濡れてるね。イリヤちゃん、もしかして期待してた？」
「そ、そんなわけっ……！」
男の不意打ちに思わず声が漏れてしまう。
大きく開いた股は男の手をすんなりと受け入れ、水音を響かせる。
陰核を指の腹で優しく擦られ、少女の肌には玉の汗が浮かび始めた。

「どう？気持ちいいでしょ？」
「……っ！し、知りません！」
「こんなにヒクつかせて、嘘ついてもバレバレだよ」
次第に男の指の動きが激しさを増す。
陰核をこねくり回されながら膣口の浅くを指先で嬲られ、少女は的確に性感を刺激され続けた。
足を閉じて抵抗することもできず、否応なしに股から伝わる信号に意識が集中してしまう。

「強情な子にはこうだ」
「……！～～～～～ッ！」
仕上げとばかりに陰核を刺激され、イリヤはあえなく絶頂へと導かれてしまった。
少女の背筋を電流が伝い、脳へと快楽の波がほとばしる。
身体を小刻みに震わせながら、少女は言葉にならない声を上げていた。

「……はっ……は……ぁっ……」
「イっちゃったねぇ」
「はぁっ……はぁっ……っぅ……」
放心状態の少女を尻目に男は衣服を脱ぎ始めた。
イリヤは快楽で飛びかけた意識のまま、涙でぼやける視界の端でその様子を捕らえる。
……ああ、また今日も、私はあの人に――。

「イリヤちゃんがエッチすぎるからさ、もうこんなに大きくなっちゃったよ」
「……っ！やだ……そんなもの近づけないで……ください……」
「何言ってるの。本当は大好きなくせに」
男の肉棒から漂う臭気に顔を歪ませるイリヤ。
しかし、そんな反応すら男にとっては興奮の材料でしかない。
これから、この醜悪なモノを眼前の美少女のナカに無理矢理ぶち込む――これ以上の喜びは無い。

「よく見ておくんだよ。これが今からイリヤちゃんのナカに入るんだからね」
「う……ぅっ……やだぁっ……」
「こんなちっちゃな身体で僕のが入っちゃうなんて……イリヤちゃんは本当にエッチだなぁ」
興奮に男の肉棒が跳ね、少女の頬にぺちりとぶつかった。
この虚勢を張った美少女の顔を、快楽で溶けきったものにする。
それが男にとっての楽しみの一つである。

「準備はもういいね？」
「はぁっ……っ……ううっ……」
ここまできて男が止めてくれることなど有り得ない。
少女の濡れぼそった膣口に男の肉棒があてがわれ、ぐっと力が込められる。
イリヤは諦めに似た覚悟を胸の内に抱え、男のモノが侵入してくる感触に身を震わせた。

「っあああああっ！！」
「っあ……あぐ……ぅっ……！」
「は……あ……はあぁっ……」
腰が思わず持ち上がるほどの勢いの挿入。
少女の身体のことなどお構いなしに、男の肉棒は一気に少女の最奥まで到達した。
口をぱくぱくさせ、少女が必死に空気を求める。

「ふぅ……入ったね」
「……ぁ……っ……」
「こんなにキッツイのに、しっかり奥まで入っちゃうなんて不思議だね。さすが僕専用の穴だよ」
誉め言葉にならない男の声を無視しながら、少女は腹部の圧迫感と戦っていた。
実際、初めの頃は男の挿入に耐えきれず魔術的なサポートを受けたりしていた。
しかし今ではどうだ。
かなり苦しくはあるが、そのまま受け入れられるようになってしまっている。

「もうすっかり僕の形を覚えてくれたみたいだね」
「あうっ！いやっ！ああぁっ！！」
男の肉棒が激しく前後する。
そのたびに少女の腰が上下に揺れ、足先が中空をガクガクと揺れた。
少女の尻に男の腰が打ち付けられるたび、パンパンとくぐもった音が部屋に響く。

「おね……がい……」
「何？」
「なか……出さない……で……」
少女は残った僅かな理性で男に訴えかけた。
こんなこと言っても無駄だと分かっているが、それでも言わないわけにはいかない。
男は粘着質な笑みを浮かべて答える。

「ダメ」
「……ぅ……あぁっ……」
少女の顔に諦めの色が濃く浮かぶ。
今日もまた、たくさん中に出されてしまう。
こんなことを続けていたら……いつかは……やがて……

「ほら、イリヤちゃんここ好きでしょ」
「……！！〜〜〜ッ！っはあん！！」
「や……いやぁっ！あうんっ！あああっ！！」
男がイリヤの奥を執拗にぐりぐりと刺激する。
もう弱いところも全て知られてしまっているのである。
どこをどう刺激すれば少女の身体が反応し、脳が焼かれていくのかを。

「そこ……だめ……だめぇっ！」
「あたま……おかし……おかしくっ……なっちゃ……ぅ」
「あ、あ、あ……ああぁぁーーーっ！！」
少女の膣がきゅうっと強く締まった。
膣壁がうねり、男の肉棒から精を搾り取るべく律動する。
外見は子供のようでも、イリヤの女の部分はしっかりと開発され、無意識に男を求めてしまう。

「イリヤちゃんだけイくなんてズルイなぁ。僕もそろそろいいよね？」
「あ、やだっ！待って……だめ、だめだめ！！」
「中に出すよ。しっかり受け取れ……ッ！」
男のピストンが激しさを増す。
それに合わせ、少女の膣もきゅうきゅうと締め上げる。
口ではイヤだと言葉を発していても、カラダは抗いようのない快楽に染め上げられていた。

「ああっ……いや……やめてぇぇっ！！」
「っ……！」
「あ……ぁぁ……っ……だめ……ぇ……」
少女の最奥で男の肉棒から精が吐き出される。
連日の行為でイリヤの中に溜まっていた精液にまた新しく追加され、あっという間に逆流し溢れてしまった。
下腹部を伝う生温かい感覚。

「だめ……って……いや……って、言ったのに……」
「ごめんごめん。イリヤちゃんのナカ、あんまりにも気持ちいいもんでさ」
「……っ」
分かっていた。
自分がどう懇願しようが、この男は構いなどしないということを。
しかし、それすらしなくなってしまったら自分がこの男の人形になってしまったのを認めることになる。
せめて、それだけは許してはならない。

「ほら、イリヤちゃん見て。さっきまでこれがイリヤちゃんの中に入ってたんだよ」
「……っ！終わったなら早く帰って……！」
膣から引き抜いた肉棒をこれ見よがしに見せつけてくる男。
しかし、少女はそれを意に介さず、強い眼差しで男を睨む。
積もりに積もった理不尽に対し、つい怒りが漏れてしまった瞬間だった。

「……へぇ、随分と反抗的な態度だね。もしかしてお仕置きが必要かな？」
「……っ！ま、待って！お願い！」
「黙れ」
そこにはもう、いつものニヤけた男の顔は無かった。
男の目に邪悪な光が宿る。
イリヤは中に出されてショックを受けていたところに言葉を投げかけられ、つい棘のある言葉を返してしまった。
それが男の癇に障ったのである。

「っあああああっ！！」
「まっ……あうっ！あんっ！あぐっ！！」
先ほどまでのものよりさらに乱暴なピストン。
少女の膣口に押し込まれた肉棒が無遠慮に突き進み、また戻ってくる。
男が腰を引くのに合わせて少女の秘肉が捲り上がりそうなほど引っ張られていた。

「ひあっ！！はげし……激しすぎる……ぅっ！！」
「こ、こわれ……壊れちゃう……ぅっ！！」
「ああっ！！やっ……あああっ！！」
イリヤにとって、この男は身体を弄んでくるという一点を除いては、わりと温和な人間だという印象である。
向けられている感情も、極めて歪んではいるが好意からのものであると認識している。
しかし、今この場では、違っていた。
男の目から“危害を加えてやろう”という意思を感じ取ってしまった。

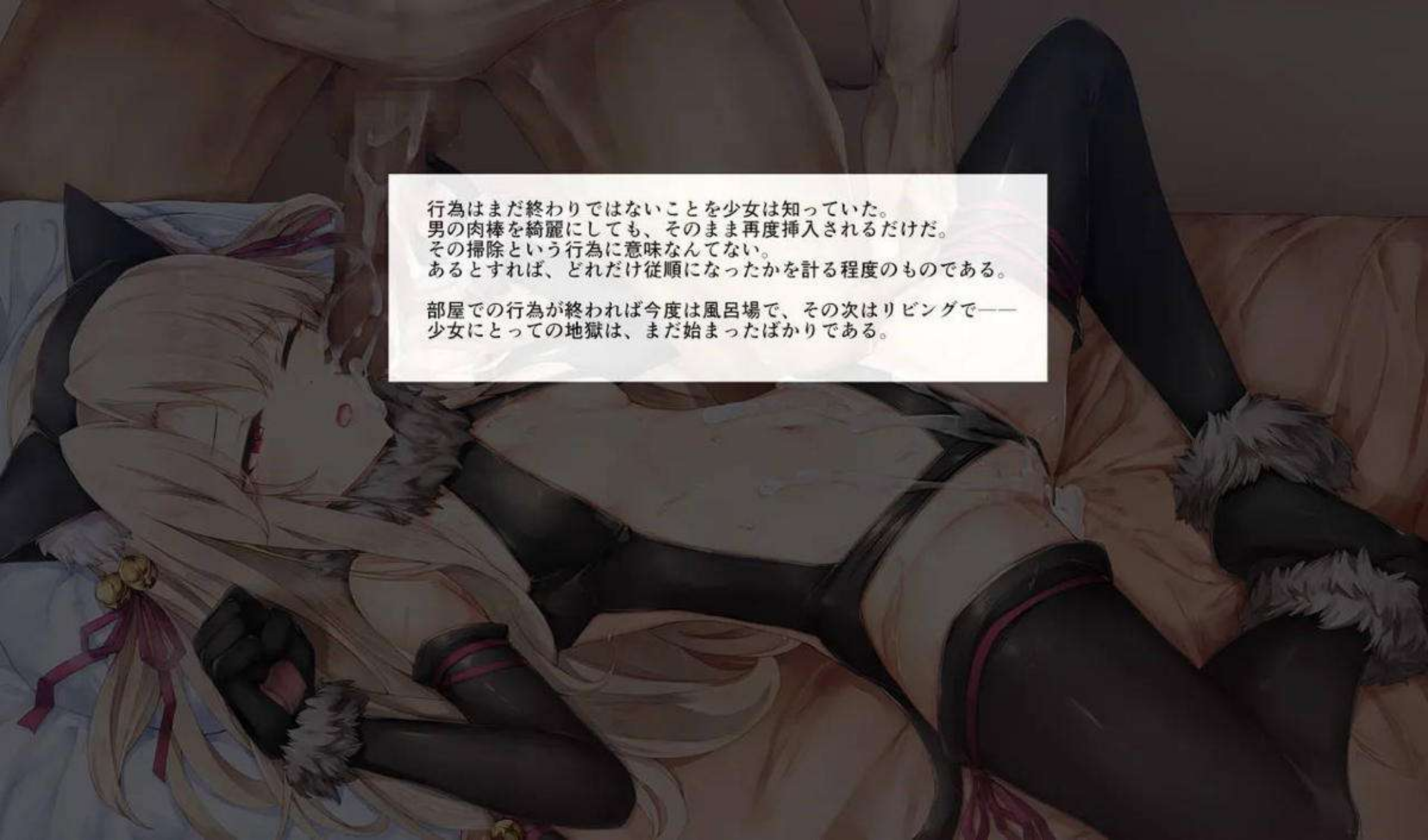
「ご、ごめっ……あああっ……！！」
「ごめんなさ……いぃ……っ！」
「ゆる……して……お願いしま……す……っ」
自分の身の丈をゆうに超え、体格にも腕力にも見られる歴然とした差。
そんな存在が自分に明確な害をなそうと襲ってきているのである。
相手が自分に対して好意を持っているということに、心のどこかで甘えに似た余裕があった。
少女は思い知ってしまったのである。自分の命がこの男の手の内にあるということを。

「あうんっ！！は……ぁ……！！」
「自分の立場、わかったかな？」
「うあっ！！わ……わかり……ましたぁっ……」
少女の心が、意思が、音を立てて折れてゆく。
もうこの人に逆らってはならない。
人形のように、すべてを受け入れてじっとしてるんだ、と。

「よし、許してあげよう」
「っぁ……あああっ！！」
射精の濁流がイリヤの最奥に流れ込む。
男は理解していた。一連の流れで、少女がより従順になったのを。
この身体を好き放題できる権利に加えて、少女の心をも支配できたのだと。

「はあっ……はぁっ……」
「ほら、種付けしてもらったらご主人様に言うことがあるでしょ？」
「は……い……。……私の、おなかに……いっぱい注いでくれて……ありがとう……ございました……」
男の精子がとめどなく溢れる。
なだらかな下腹部は男の精子でぬらぬらと妖しくきらめいていた。
少女の頬に一筋の涙が伝う。

「うん、すごく良いよ、イリヤちゃん……！」
「っ……うぅぅっ……」
秘部がビリビリと痺れるような痛みを発している。
何度も挿入を繰り返し、粘膜と粘膜を擦り合わせていたのだから当然である。
気だるいような疲労感に支配され、イリヤは意識が暗闇に呑まれそうになった。



行為はまだ終わりではないことを少女は知っていた。
男の肉棒を綺麗にしても、そのまま再度挿入されるだけだ。
その掃除という行為に意味なんてない。
あるとすれば、どれだけ従順になったかを計る程度のものである。

部屋での行為が終われば今度は風呂場で、その次はリビングで――
少女にとっての地獄は、まだ始まったばかりである。

誰も助けには来ない。
人払いの結界が張られたこの家には。

その間の出来事は、周囲の人間にとっては不自然が無いように解釈される。
この家に関わるもの全員が、それぞれこの家に近づかない理由を勝手に考えて実行するのである。
ある者は突如旅行へ行き、ある者は遊びに来る予定をキャンセルする。

男にとっての楽しいひと時は、まだ始まったばかりである。

「それじゃお掃除お願いね」
「……はい……」
朦朧とする意識の中、男の肉棒が眼前に突き出される。
残っていた精子が頬に垂れ、少女の整った顔を汚してゆく。
うつろな目を携えて、イリヤは生返事をするしかなかった。